

高等学校における文法指導

市 田 弘 之

一、はじめに

私は、新任以来八年間、愛知県立平和高等学校に勤務している。研修会などで他校の先生方と顔を合わせることもあると、大抵「大変だそうですね」と言葉をかけられる。事実、他校に比べると生徒指導上の問題が多く、生徒の学力も低い。しかし、その中にいる私は特に「困った。もうお手上げだ」とは感じていない。むしろ、若々しく、意欲に満ち、競争心があり、困った時には助力を惜しまないスタッフに囲まれて充実した日々を送っている。忙しくてたまらないことは確かだが、それはどの学校でも同じことだろう。新しく赴任して来られた先生や非常勤の講師の先生の中には、全く授業が成立しないということが起こることもある。なぜ授業が成立しないのかということを考えていくと、生徒がふざけてしまう、言うことを聞かない、ということになるが、そもそものはじまりは、授業者が生徒を理解していないということになるだろう。生徒は今、何が知りたいのか。何がしたいのか。

(もちろん、授業中に授業以外のことがしたいこともある)自分なりにがんばったから認めてほしいのか。手を抜いたから叱られていないかとびくびくしているのか。その辺のところが理解されていいて、叱ったり、ほめたり、受け入れたり、はねつけたり、励ましたり、諭したりすることができれば、生徒の信頼は得られると思う。この先生の言うことを聞いていけば間違いないという安心感が与えられるようになればよいのである。そうでなければ、生徒はすぐにそっぽを向いてしまい、何を言っても聞く耳を持たなくなる。もちろん、年に何回かは血相を変えて真剣に怒ってやらないと、こちらの真剣さが生徒に伝わらないという面はある。

二、生徒の学力

さて、私の勤務する学校は、県立の普通科高校で現在二十八学級あり、開校十二年目になる。名古屋市の北西、濃尾平野ののかな田園地帯にある。学校の周囲は、この地方特産の苗木の畑や、

水田に囲まれていて、公共の交通機関にはあまり恵まれていない。校名の「平和」は、中島郡平和町という地名によっている。(ただし、学校の所在地は稲沢市である。)

地元の稲沢市や平和町からの生徒が約六割だが、通学に一時間以上かかるかなり遠方からも「こししか入れない」という理由で生徒が集まってきている。私は今年(平成二年度)二年生を担当しているが、平成元年に入試制度が変わり、その入試制度ではじめて入ってきた生徒たちである。その年、本校は大きく定員割れを起し、まさにだれでも入れるという状況であった。それまでも学力的には低い生徒の多い学校であったが、この年の入学生は学力的に低い者が一段と多くなった。

入学してすぐ、オリエンテーションテストとして、漢字の学力を調べた。三月下旬の合格者説明会で漢字練習の問題集を渡し、範囲を指定し、春休みの宿題として課し、学習プリントを作って提出させた。出題内容は、

- (一) 小学校一年から三年に配当されている教育漢字
(二) 三字四字熟語

とした。その結果を分析したところ、(資料①) 小学校三年までの漢字については、女子で約八割、男子で約六割、クラス全体で約七割の得点をしていることから、この程度の学力は多くの生徒が持っているといえる。しかし、小学生三年程度の漢字が半分も書けない生徒もクラスに六人、学年では五十人以上もいることがわかった。例を出すと、「体育館」「生年月日」「育てる」「親切」などの漢字が書けないという生徒もいるのである。これでは日常生活に

も困ってしまう。別のテストの時には「廊下」が読めないという生徒がいることもあった。また、「期待」という漢字はクラスの半分以上が書けていない。この結果を見て、これはとんでもなく学力が低いと思っただのが正直な感想であった。

三、古文の授業の方針

このような生徒を受け入れたわけだが、古文の授業は今までもおりの方針で入門をはじめた。今までどおりというのは、国語Iを現代文と古文に分けて、別の教員が担当するというやり方である。古文の文法については、一年生ですべてのことをひととおり学習させ、二〜三年生でそれらを広げ深めていくという方針であり、毎日の授業では教材の中で特に取り上げるべき文法事項を限定して重点的に指導し、時には文法のみを単元を設定して、反復練習して徹底して覚えさせるという方法である。こういう指導の方針を採る根底には、もちろん、生徒の半数以上が上級学校への進学を希望し、実際に大学、短大へと進学してゆくという事実がある。

四、古典文法の授業

古文の入門教材としては、「ちこのそら寝」「なよ竹のかぐや姫」「筒井筒」を用いた。これらの教材では、文法事項や、それに関連することがらとして、辞書の使い方、いろは歌、歴史的かな遣

い、五十音図、助動詞(けり・つ・ぬ・たり・す・さす)・接続助詞(ば)などを教えた。(そのとき授業を終えたあとのまとめとして生徒にやらせたプリントが資料②である。)そのあとで、特に単元を設けて動詞の活用を教えた。教材として七枚のプリントを作成した。(資料③、④)

生徒の様子から考えると、口語文法についてもほとんど理解できていないと思われるので、大まかな品詞の分類や、活用とはどういうことかということからはじめて、「終止形で示された動詞について、活用の種類が区別でき、その動詞の活用表が書ける。」ということだけを目標にして授業を行った。

プリントの作成にあたっては、

- ① 品詞の分類、活用の定義などについては、文法的な厳密さを追求することよりも、やさしいことばで、自分の言語体験に照らして、ああ、なるほどと納得して理解できるように努めた。

- ② 活用の種類は、四段活用、上一段活用、上二段活用、下一段活用、下二段活用という規則的な活用をはじめにして、変格活用を後にした。動詞の活用には明確な規則性があるというこをまず理解させるためである。

- ③ 多くの練習問題をこなし、用例に多く接することによって、体験的に文法の規則性を身につけていけるようにした。

- ④ 生徒が理解していく上で消化不良を起こさないように、一時間で教える内容をしばるとともに、その時間のねらいをはっきりさせた。

ということに気をつけた。

授業は、約十時間かけて行ったが、学期末のテストの結果から判断すると、「終止形で示された動詞について、活用の種類が区別でき、その動詞の活用表が書ける。」という目標は半分ほどしか達せられていなかった。その後も夏休みの課題などで反復練習させたが、二学期も半ばを過ぎるとかえって忘れてしまった生徒の方が多くなってしまった。

この動詞の活用の指導を通して考えさせられたことは、文法を徹底、定着させようと丸暗記、文法、つけにしても効果がなく、かえって古典ぎらいをつくりはしないかということである。一年生の入門の時期に十時間も動詞活用の単元を設定して、しかも、それがあまり効果がなかったと考えると、もっと多くの作品に接するようにするべきだったという思いが起ってくる。

一年生の最初でこれから学んでゆく古典を嫌いにしてしまつては大変なことである。古典はおもしろいと感ずるようになってこそ、自ら辞書を引き、文法の本をひもとこうという気持ちが出てくるものだと思う。しかし、古典を学ぶ上で、文法は避けて通ることのできないことがらである。大学入試で出題されるということ以前に、古典文法を知らなければ、自分で古文が読解できるようにはならず、古典のすばらしさを味わうこともできないのである。自分で古文が読解できるようになっていかなければ、古典の授業はつまらないものになってしまうだろう。そう考えると、文章を読み味わっていく過程の中で文法を生かしていくことが一番大切であるということが言えるのではないだろうか。

現在私は、次のような方針で文法を扱うことにしている。

① 自ら古文を読み取る能力を養う上で文法の知識は不可欠である。どんなに抵抗があってもやらなければならない。

② 二年、三年と学年が進み、授業を担当する教員が代っても、また、上級学校へ進んでも戸惑うことのないような基本的な古典読解の方法を身につけさせる必要がある。

③ 作品を興味深く読んでいく上で必要であるという状況において、文法を教えるべきである。文法を教材から切り離さないことを原則とする。

④ しかし、ある程度まとまった形として文法事項を整理して、体系的に理解する時間を設けることは、理解を進める上で必要なことである。

⑤ 覚える文法ではなく、できるだけ考えさせる。現代語で考えさせたり、古語の成り立ちや、現代語とのつながりを紹介したりする。

五、古文の授業

実際の古文の授業は、ノートに本文を写して、単語を辞書で調べ口語訳するというオードックスな方法で進めている。これは、学校内の他の国語科の教員もほとんど同じ方法を採用しており、一つの学年内で指導内容も綿密な打ち合わせによって統一されておぼろ、三年間のどの時期にどんな文法事項を教えるかということもほぼ固まっているということが背景にある。そのためのメリット

として、三年間でどの生徒も系統的な古文の学習ができること、

また、学年が進行して教科を担当する教員が代っても、前年度の教科担任によって教えていたことがバラバラだったり、授業の進め方やノートの作り方が異なっていて、生徒が慣れるまでに時間がかかったりといった問題が起こらないということがあげられる。

授業を進めていく上では、内容把握、鑑賞に重点を置き、文法事項はごく限られたものだけにしている。内容把握、鑑賞の指導がすんだ後、もう一度、文法事項などの重点項目を復習するという形を採用している。(重点項目を復習するためのまとめのプリントが資料②) このような復習をすることで、生徒には学習目標が明確になり、文法事項などの定着もされやすいのではないかと思っている。

今、文法事項をごく限られたものだけにしていると述べたが、どうしても教えておかなければならないことがらや、その教材で教えることが最適であると考えられることがらは、どんなに難しくとも思われることでも逃がすことはできない。

例えば、一年生の二学期に枕草子の有名な「雪のいと高う降りたるを」を扱ったが、敬語法を理解させることは、難しく、多少抵抗があることも思われたが、平安朝の宮廷生活を紹介できるはじめての教材であったので、尊敬語、謙譲語について教えた。教えるにあたっては、現代語の例を出して説明し、文法的な厳密さを欠くことを恐れず、

① 尊敬語は、自分の高い人の動作。上から下へ。下さる。おっしゃる。いらっしゃる。

② 謙讓語は、身分の高い人への動作。下から上へ。さし上げる。申し上げる。参上する。いただく。伺う。ということだけをまず理解させることを徹底した。

六、口語文法の扱いについて

高校で口語文法を体系的に教える必要はないと思う。しかし、古典文法の学習を丸暗記ではなく、考える文法として位置づけたときに、現代語を例にして考えるという方法はぜひ試みられるべきである。

例えば、形容詞とはどんなことばかという授業をしたときに、まず、「大きい、広い、悲しいなどの『い』で終わることばが形容詞である」ということだけを言っておいて、何人もの生徒を指名して形容詞をあげさせた。

生徒がどんどん形容詞をあげてゆく。それを、

A 大きい、広い、小さい、せまい、細い、暗い、明るい、うるさい、白い、黒い、赤い、きたない、寒い、暑い、古い
B 悲しい、うれしい、楽しい、苦しい、やかましい、喜ばしい、新しい、かがやかしい、さびしい、なつかしい

というように板書していった。こうするうちに、生徒はまず、形容詞には、大きい⇄小さい、広い⇄せまい、悲しい⇄うれしい、などの対になることばが多く存在するという性質に気づき、すでに板書されていることばと対になることばをさがして例としてあげようとする。また、よく気が付く生徒は、喜ぶ⇄喜ばしい、輝

く⇄輝かしい、という具合に形容詞がつくれることに着目して、そういう例を出してくる。さらに、A、Bと分けて板書してあるのを見て、形容詞には「い」で終わるものと「しい」で終わるものとがあること、「い」で終わるものには、「ようす」を表すことばが多く含まれること、「しい」で終わるものには「人の気持ち」を表すことばが多く含まれることに気づく。

このことから、形容詞は、状態、性質、感情などを表し、二種類の活用（古語ではク活用、シク活用）があるということ覚えらることとしてではなく、発見したということで、生徒は理解していくのである。

七、むすび

古文の文法の指導のあり方を考えていくと行き当たるのは、国語の学力とは何かという問題である。なぜ文法を学ぶ必要があるのか。なぜ古文を学ばなければならないのか。それを生徒に理解させることはなかなか難しい。「大学入試に出るからだ」「覚えな」と進級できないぞ。」こんなことしか言えない教師ではありたくない。

私はよく生徒にこう言う。「役に立たないからやるんだ。」と。体育の授業について、「なぜ体育などという科目があるんだ。社会に出てから役に立たないじゃないか。」という生徒はまずいない。多くの生徒は喜んでやっている。国語の時間もそうでありたい。何かに役立つからやるのではなく、国語の学習そのものが目的

となつて、毎日の生活と結びつき、視野を広め、考えを深め、こ
とばの巧みな使い手になつていつてもらいたい。

今、私が国語の授業を通じて願っていることは、

一、日本語がよりうまく使いこなせるようになってほしい。

一、自分の理解できる世界を少しでも広げてほしい。

ということである。

(愛知県立平和高等学校教諭)

資料①

1年 1組 オリエンテータープロジェクト 分析

国語教科書
平成15年5月23日

1 テストについて

漢字の総合測定という問題集の中から問題を指定して入学前の課題とし、プリントを作成し練習させた。指定した問題は、

①小学校1年か5.3年に配されている教育漢字（20ページ）
②三十四字熟語（6ページ）

テストは、①について70問70点 ②について30問30点 計100点で作成した。テストは、4月8日1限（50分）に実施した。計45名 4月8日現在）の結果について以下分析は、1年1組（男23名 女22名）の結果について分析したものである。

2 得点の度数分布（100点満点）

| | 0～ | 10～ | 20～ | 30～ | 40～ | 50～ | 60～ | 70～ | 80～ | 90～ | 100 | 計 | 平均 |
|---|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|------|
| 男 | | 3 | 2 | 1 | 2 | 7 | 2 | 3 | 3 | | | 23 | 51.6 |
| 女 | | | | | 4 | 1 | 8 | 8 | | 1 | | 22 | 64.6 |
| 計 | | 3 | 2 | 1 | 6 | 8 | 10 | 11 | 3 | 1 | | 45 | 57.9 |

男子の平均が低い、30点以下が6名いる。最高94点 最低4点
(学年平均 最高94点 最低4点)

3 小学校3年までの教育漢字についての得点の度数分布（70点満点）

| | 0～ | 10～ | 20～ | 30～ | 40～ | 50～ | 60～ | 70 | 計 | 平均 | 得点率 |
|---|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|----|------|-------|
| 男 | | 2 | 2 | 8 | 6 | 3 | | | 23 | 43.6 | 62.2% |
| 女 | | | 2 | 3 | 6 | 11 | | | 22 | 55.5 | 79.2% |
| 計 | | 2 | 2 | 4 | 6 | 12 | 14 | | 45 | 49.4 | 70.2% |

男子女子の約8割、男子女子の約6割、クラスで約7割の得点をしている。しかし、小学校3年生以下の漢字が半分も書けない者（35点以下）が6人いる。最高68点 最低12点

4 三十四字熟語の得点分布

| | 0～ | 5～ | 10～ | 15～ | 20～ | 25～ | 30 | 平均 | 得点率 |
|---|----|----|-----|-----|-----|-----|----|-----|-------|
| 男 | 1 | 0 | 5 | 3 | 4 | 1 | | 8.0 | 26.5% |
| 女 | | 5 | 8 | 7 | 1 | | 1 | 9.3 | 30.9% |
| 計 | 1 | 5 | 13 | 10 | 5 | 1 | 1 | 8.5 | 28.7% |

100点の者4名（男子のみ）を含め、10点未満28名と、三十四字熟語については、ほとんどできていない。得点率もクラス平均で三割を切っている。しかし、20点以上の者2名については、入学前の課題をよく学習して、成果を上げたと思われる。

5 小学校3年までの教育漢字について、個々の正答割合

| A 正答数の少ないもの (正答数 人) | 男 | | 女 | | 計 |
|---------------------|----|----|----|----|----|
| | 人数 | 割合 | 人数 | 割合 | |
| 気後れ | 3 | 1 | 1 | 4 | 5 |
| 夏天のへきれき | 8 | 2 | 1 | 10 | 9 |
| 社交 | 6 | 4 | 1 | 7 | 7 |
| 始終 | 4 | 4 | 1 | 5 | 10 |
| 一糸乱れぬ | 5 | 7 | 7 | 12 | 13 |
| | | | | | 21 |

(下線のあるものは下線部について解答する)

B 易しい漢字で間違いのあるもの (誤答数 人)

| | 男 | | 女 | | 計 |
|------|----|----|----|----|----|
| | 人数 | 割合 | 人数 | 割合 | |
| 北海道 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 話 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 体育館 | 1 | 0 | 0 | 1 | 2 |
| 銀行 | 1 | 0 | 1 | 1 | 2 |
| 地図 | 1 | 0 | 1 | 1 | 2 |
| 生年月日 | 1 | 0 | 2 | 2 | 3 |
| 葵 | 2 | 1 | 1 | 3 | 3 |
| | | | | | 12 |
| | | | | | 13 |

6 三十四字熟語の例

| 読ませたもの | 未習有 | 一期一会 | 荒唐無稽 | 絆糸曲折 | 鼠新習 |
|--------|------|------|------|------|------|
| 読ませたもの | 遠路客 | 責任転嫁 | 無恥狡猾 | 東奔西走 | 美辞麗句 |
| その他の熟語 | 骨子 | 経緯万端 | 三言両語 | 人向小異 | 勢利短氣 |
| | 総体絶命 | 無異夢中 | 量感立斯 | 日進月歩 | 奇想天外 |
| | | | | | など |
| | | | | | 大層不敵 |
| | | | | | など |
| | | | | | 動情感悪 |

十文のちとめ その① (あ)のちから(意)
(な)ちから(平語)

一 一 五十和語

なつたて

うた

ち

あひあへ

あつちあつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

あつち

111 歴史のかぎ

もの申しちからばん、おとろかせたまで、

いさ田の道の新、押たは家と限りなし、

も光をたむ一編ありや、さうてつてなると、

誰に入まてしなる、案をうやうかしくなへ、

こは、なぐり書のたまつて、

四 経書を引へ

活用のある語は () 形にして引へ、ただし、形勢動詞は語幹で引へ、

★活用のある語 【因縁類】(古戦の文法十一〜十三巻)

1 【物作】存在を義し、動詞の形の形が原の語、

2 【性質】性質を義し、動詞の「じ」。

3 【性質】性質を義し、動詞の「だり」。

4 【折の三つをなせて () とする、】他の語の下についで、そまをまを義せよ、

十八 擬動詞「は」

意味 取つた

A そをを良はは「三十三はかりなる人、

さうてつてなると、

B いとけははは「誰に入て義か、

五 助動詞

けり

つ

たり

す

なんだいもなんだはしもうを待つらだ
 かなじういふべから死の床で
 わたしの手からとどいてうしろへ
 あなたのそばに寝かざりて寝んだ
 ハート色の敷きかじり
 その鼓動の床のなるとしうのそば
 ぼよんだの敷きかじりをしてしだ
 あなたの胸へ抱え口がすすんだ
 わたしの手を握りあなたの力の握りて
 あなたの呼吸に震はるな
 いづの唇に吸ひ
 千重千はもとの千重となり
 生涯の愛を一生にわたす

唇は紅の、そよよと入るなり
 山は、少しあかり、またきたる風の
 そよよと吹きたる
 夏は、月のこころはなかり、聞かぬ
 道におもへ飛ひあかぬ、まだ、だ
 じいごと、西の空に光りて行くも
 かじ、雨など降るもあじ

(二) 〇〇の語句を添えよ。(三) 〇〇の語句を添えよ。

動く 美し 静なり 山 動く 見る 深し 備 思ふ 長し あり
 静か 静し 静かなり 静し 待つ 人 寂 静 静 静し 子 葉 たり
 静し 静かなり 出づ 来る こと 静 静く 静かなり なる

【二】 練習

(一) 次の名詞を動詞、名詞、動詞、形容詞、形動詞のつとに分類せよ。

他に、副詞、連体詞、接頭詞、感動詞がある。

- | | | | |
|-------------|---|--------------------------|------------------------|
| 活 用 形 | { | る () ……「の」や「と」を指します。 | () ……他の語のついでに聞かせる。 |
| | | あ () ……動作を終わる、の終止形になる。 | () ……他の語のついでに、緊張を添える。 |
| | | が () ……「を」を終わる。「し」で終わる。 | () ……「を」を終わる。「な」で終わる。 |
| | | は () ……「を」を助詞。 | () ……「を」を助詞。 |
| | | は () ……「を」を助詞。 | () ……「を」を助詞。 |

【三】 品詞分類 (単語)

*「〜」は「〜」で保つておく。

十世文芸「その」の品詞

その活用形の下にどのような語が続くのかも覚えます。

| | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 読む | 読む | | | | | | | |
| 読み | | | | | | | | |
| 読み | 読み | 読み | 読み | 読み | 読み | 読み | 読み | 読み |
| 読み | 読み | 読み | 読み | 読み | 読み | 読み | 読み | 読み |
| 読み | 読み | 読み | 読み | 読み | 読み | 読み | 読み | 読み |

和訳は「読む」として、その下に「読む」

| | | | | |
|----|----|----|----|----|
| 読む | 読む | 読む | 読む | 読む |
| 読み | | | | |
| 読み | 読み | 読み | 読み | 読み |
| 読み | 読み | 読み | 読み | 読み |
| 読み | 読み | 読み | 読み | 読み |

【例】動詞活用

「読む」の活用形を下の表に記入しなさい。

- ①上のように「読む」という動詞は、
- () のようにし、
 - () のようにし、
 - () のようにし、
 - () のようにし、
 - () のようにし、
 - () のようにし、
 - () のようにし、
- という。

日本語文法ハンドブック その三 (動詞活用 2)

【三】活用形の活用形 — 活用形は「読む」の () のようにし、

活用形は「読む」の () のようにし、

上段活用

五十音図の()段だけで活用。

| | |
|-----|-----|
| 基本形 | 基本形 |
| 終止形 | 終止形 |
| 連体形 | 連体形 |
| 已然形 | 已然形 |
| 命令形 | 命令形 |

上段活用の動は()と()の数の多い。

上段活用の動は以下の表の数値

| | | | | | |
|---------------|-----|-----|-----|-----|---------------|
| 基本形 | 終止形 | 連体形 | 已然形 | 命令形 | 活用 の 種類 |
| 終止形 | 終止形 | 終止形 | 終止形 | 終止形 | |
| 連体形 | 連体形 | 連体形 | 連体形 | 連体形 | |
| 已然形 | 已然形 | 已然形 | 已然形 | 已然形 | |
| 命令形 | 命令形 | 命令形 | 命令形 | 命令形 | |
| 活用 の 種類 | | | | | |

上段活用

上段活用

| | | | | | |
|---------------|-----|-----|-----|-----|---------------|
| 基本形 | 終止形 | 連体形 | 已然形 | 命令形 | 活用 の 種類 |
| 終止形 | 終止形 | 終止形 | 終止形 | 終止形 | |
| 連体形 | 連体形 | 連体形 | 連体形 | 連体形 | |
| 已然形 | 已然形 | 已然形 | 已然形 | 已然形 | |
| 命令形 | 命令形 | 命令形 | 命令形 | 命令形 | |
| 活用 の 種類 | | | | | |

四段活用の復習

古典文法プリント その四 [動詞活用 3]

五十音図の()段・()段・()段の二段で活用。

| | |
|-----|-----|
| 基本形 | 基本形 |
| 終止形 | 終止形 |
| 連体形 | 連体形 |
| 已然形 | 已然形 |
| 命令形 | 命令形 |

終止形・連体形・已然形が代格と連格で注意

- 上段活用の終止形
 - 連がる () 起る ()
 - 閉る () 燃る ()
 - 老いる () 下る ()
- や上段活用は()の種だけ

| | |
|-----|-----|
| 終止形 | 終止形 |
| 連体形 | 連体形 |
| 已然形 | 已然形 |
| 命令形 | 命令形 |

| | | | | | |
|---------------|-----|-----|-----|-----|---------------|
| 基本形 | 終止形 | 連体形 | 已然形 | 命令形 | 活用 の 種類 |
| 終止形 | 終止形 | 終止形 | 終止形 | 終止形 | |
| 連体形 | 連体形 | 連体形 | 連体形 | 連体形 | |
| 已然形 | 已然形 | 已然形 | 已然形 | 已然形 | |
| 命令形 | 命令形 | 命令形 | 命令形 | 命令形 | |
| 活用 の 種類 | | | | | |

文法⑦

| | | | | | | | | |
|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|--------|
| 基本形 | 語幹 | 未然形 | 連体形 | 終止形 | 連体形 | 已然形 | 命令形 | 活用用の種類 |
| 出す | | | | | | | | 行上段活用 |
| 出る | | | | | | | | 行上段活用 |
| 出す | | | | | | | | 行上段活用 |
| 出る | | | | | | | | 行上段活用 |
| 出す | | | | | | | | 行上段活用 |
| 出る | | | | | | | | 行上段活用 |
| 出す | | | | | | | | 行上段活用 |
| 出る | | | | | | | | 行上段活用 |
| 出す | | | | | | | | 行上段活用 |
| 出る | | | | | | | | 行上段活用 |

- 出す ()
 出る ()
 出す ()
 出る ()
 出す ()
 出る ()
 出す ()
 出る ()
 出す ()
 出る ()
 出す ()
 出る ()

練習一

練習一

- 行上段活用長の三體たひ
- 語幹で活用するものは行上段活用の () だけ
- 終止・連体形・已然形が現れ通うので終

出す

| |
|--|
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |
| |

○ 二級で活用。

五十音図の () 段・ ()

| |
|-------|
| 下二段活用 |
| 出す |

| | | | | | | | |
|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 基本形 | 語幹 | 未然形 | 連体形 | 終止形 | 連体形 | 已然形 | 命令形 |
| 出す | | | | | | | |

五十音図の () 段だけで活用。
この活用の前は () 二語のみ

| |
|-------|
| 下二段活用 |
| 出す |

古語文法プリント その五 [動詞活用4]

| | | | | | | | | |
|-----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|--------|
| 基本形 | 語幹 | 未然形 | 連体形 | 終止形 | 連体形 | 已然形 | 命令形 | 活用用の種類 |
| 出す | | | | | | | | 行上段活用 |
| 出る | | | | | | | | 行上段活用 |
| 出す | | | | | | | | 行上段活用 |
| 出る | | | | | | | | 行上段活用 |
| 出す | | | | | | | | 行上段活用 |
| 出る | | | | | | | | 行上段活用 |
| 出す | | | | | | | | 行上段活用 |
| 出る | | | | | | | | 行上段活用 |
| 出す | | | | | | | | 行上段活用 |
| 出る | | | | | | | | 行上段活用 |

次の動詞の活用表を完成せよ

- 出す () 出す ()
 出る () 出る ()
 出す () 出す ()
 出る () 出る ()
 出す () 出す ()
 出る () 出る ()
 出す () 出す ()
 出る () 出る ()
 出す () 出す ()
 出る () 出る ()
 出す () 出す ()
 出る () 出る ()

下二段活用の終止形

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 来 | 試 | 死 | 聞 | 走 | あ | 畢 |
| 痛 | む | ぬ | こ | る | り | る |
| 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 | 行 |
| 痛 | 痛 | 痛 | 痛 | 痛 | 痛 | 痛 |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |
| | | | | | | |

練習 三 語彙を作れ

- ① 上 読用 覚る + す ！
- ② 上 読用 行く + す ！
- ③ 上 読用 書く + す ！ 書かす (書かす)
- ④ 習得用 () 読S音 ()
- ⑤ 習得用 () 読S音 ()
- ⑥ 習得用 () 読S音 ()
- ⑦ 習得用 () 読S音 ()
- ⑧ 習得用 () 読S音 ()
- ⑨ 習得用 () 読S音 ()
- ⑩ 習得用 () 読S音 ()
- ⑪ 習得用 () 読S音 ()
- ⑫ 習得用 () 読S音 ()
- ⑬ 習得用 () 読S音 ()
- ⑭ 習得用 () 読S音 ()
- ⑮ 習得用 () 読S音 ()
- ⑯ 習得用 () 読S音 ()
- ⑰ 習得用 () 読S音 ()
- ⑱ 習得用 () 読S音 ()
- ⑲ 習得用 () 読S音 ()
- ⑳ 習得用 () 読S音 ()
- ㉑ 習得用 () 読S音 ()
- ㉒ 習得用 () 読S音 ()
- ㉓ 習得用 () 読S音 ()
- ㉔ 習得用 () 読S音 ()
- ㉕ 習得用 () 読S音 ()
- ㉖ 習得用 () 読S音 ()
- ㉗ 習得用 () 読S音 ()
- ㉘ 習得用 () 読S音 ()
- ㉙ 習得用 () 読S音 ()
- ㉚ 習得用 () 読S音 ()
- ㉛ 習得用 () 読S音 ()
- ㉜ 習得用 () 読S音 ()
- ㉝ 習得用 () 読S音 ()
- ㉞ 習得用 () 読S音 ()
- ㉟ 習得用 () 読S音 ()
- ㊱ 習得用 () 読S音 ()
- ㊲ 習得用 () 読S音 ()
- ㊳ 習得用 () 読S音 ()
- ㊴ 習得用 () 読S音 ()
- ㊵ 習得用 () 読S音 ()
- ㊶ 習得用 () 読S音 ()
- ㊷ 習得用 () 読S音 ()
- ㊸ 習得用 () 読S音 ()
- ㊹ 習得用 () 読S音 ()
- ㊺ 習得用 () 読S音 ()
- ㊻ 習得用 () 読S音 ()
- ㊼ 習得用 () 読S音 ()
- ㊽ 習得用 () 読S音 ()
- ㊾ 習得用 () 読S音 ()
- ㊿ 習得用 () 読S音 ()

その題に「す」をつけて来録せよ(ついでに「す」を削る)

① 「す」を付けて区別するもの

- A 日記帳するもの (その語彙を意味するもの)
- ① 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ② 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ③ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ④ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ⑤ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ⑥ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ⑦ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ⑧ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ⑨ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ⑩ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ⑪ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ⑫ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ⑬ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ⑭ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ⑮ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ⑯ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ⑰ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ⑱ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ⑲ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ⑳ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㉑ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㉒ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㉓ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㉔ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㉕ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㉖ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㉗ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㉘ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㉙ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㉚ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㉛ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㉜ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㉝ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㉞ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㉟ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㊱ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㊲ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㊳ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㊴ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㊵ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㊶ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㊷ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㊸ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㊹ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㊺ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㊻ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㊼ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㊽ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㊾ 穴に読用 () 一語と () どの漢語
- ㊿ 穴に読用 () 一語と () どの漢語

動詞の活用と種類を見分ける

その七

古語文法プリント

【動詞活用 6】

練習 一 穴の題に「す」をつけて来録せよ

- ① 覚る + す ！
- ② 行く + す ！
- ③ 書く + す ！
- ④ 読む + す ！
- ⑤ 試む + す ！
- ⑥ 死ぬ + す ！
- ⑦ 走る + す ！
- ⑧ あり + す ！
- ⑨ 畢る + す ！

練習 二 穴の動詞を区別せよ

- ① 往る
- ② 買ふ
- ③ 敷く
- ④ 出す
- ⑤ 知る
- ⑥ 来る
- ⑦ 行く
- ⑧ 死ぬ
- ⑨ 試む
- ⑩ 覚る
- ⑪ 試む
- ⑫ 死ぬ
- ⑬ 往る
- ⑭ 買ふ
- ⑮ 敷く
- ⑯ 出す
- ⑰ 知る
- ⑱ 来る
- ⑲ 行く
- ⑳ 死ぬ
- ㉑ 往る
- ㉒ 買ふ
- ㉓ 敷く
- ㉔ 出す
- ㉕ 知る
- ㉖ 来る
- ㉗ 行く
- ㉘ 死ぬ
- ㉙ 往る
- ㉚ 買ふ
- ㉛ 敷く
- ㉜ 出す
- ㉝ 知る
- ㉞ 来る
- ㉟ 行く
- ㊱ 死ぬ
- ㊲ 往る
- ㊳ 買ふ
- ㊴ 敷く
- ㊵ 出す
- ㊶ 知る
- ㊷ 来る
- ㊸ 行く
- ㊹ 死ぬ
- ㊺ 往る
- ㊻ 買ふ
- ㊼ 敷く
- ㊽ 出す
- ㊾ 知る
- ㊿ 来る